

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 サノバビル 5.6F
03-3359-7611 (Tel) 03-3355-1462 (Fax)

<http://www.genken.ac>

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。

Spring 2022 vol.7 2022 5. 6 発行



金瀬胖 「砂採場」1990年代の千葉より

1945年8月以来、世界は瓦礫の上にできている。どんなに高いビルを建ててもその土台には1945年の瓦礫がある。爆発した原発の瓦礫に踏み込んだロシアの戦車部隊が被曝を恐れない勇者と讃えられる。もう一度、世界を壊そうとする愚かな欲望は何故生まれるのか。

マルチェロマストロニアンニ、ソフィアローレンが主演する映画「ひまわり」(1970)はネオリアリズムの反戦映画としていま再上映が広がっている。独ソ戦争の激戦地となったウクライナのひまわり畑の下には無数の兵士の骨が埋められている。悲恋と反戦の映画と言われる。終わりはソフィアローレンが駅で流す悲しい涙。本当は涙で終わってはいけないのだ。

J・クーデルカは若い時、舞台写真、ジブシーを撮り写真の眼を磨いていた。毎日のように。1968年プラハで『侵攻』を撮った。ソ連の戦車と素手で闘う市民を撮ったが、何故そんなことができたか、という質問に「それは市民と同じことをしたまでだ」と言った。その市民とは違って彼はカメラを兵士に向けた。無二の写真記録となった。写真はプラハで発表できず、イギリスに亡命しブレッソンなどの援助により写真の配信で生活した。チェコでの発表は1990年まで待たねばならなかった。亡命後の写真は文字通り無国籍者、流浪者『EXIL』であった。その流浪感は初期作の『ジブシーズ』と重なる。ソ連崩壊後は『カオス』としての世界を撮る。ここで詳述はできないが虚構と現実が入れ子になり「自ら破滅の方へ進もうとする」この時代の風景、人間の姿を感じる。

クーデルカはブレッソン、シャーフスキーの教示も大事だったが、写真集、写真展の大事な仕事を成し遂げるにはロベール・デルビール(編集・デザイン)の批判的介入が絶対に不可欠だった、「その作業で自分の写真がわかった」と述懐している。そして「一つの世界が消え去ろうとしている。わたしはそこに何が存在するかを撮りたいと思う。」と。(カレル・フィジター「クーデルカと対話」ノート)

教務主任・金瀬胖

CONTENTS

講師特集号

英伸三
宮本遼
山本やす子
足立君江
金井紀光
飯塚明夫
入江進
尾辻弥寿雄
亀井正樹

Gphotograph 創刊のお知らせ



英伸三 写真集「上海天空下」より「街角の歩く人形売り」虹口区甜愛支路 2002 年



英伸三 「雨の交差点」四谷三丁目



「クモリ空とピンク色」 宮本遼

晴れの日が好きなのですが、こんな日も良いですね♪



「出羽歩き」 山本やす子



「東京の野菜畑」 足立君江

杉並区に荻窪に点在する野菜農家が数件あり、偶然の出会いから取材が始まった。関東ローム層の地域で、水利は極めて悪いが古くから善福寺川が流れ、昔から水田が開かれ水路の跡もある。住宅街の真ん中に土地を持つ農家だが、昭和の中頃まですべて畑であり、クヌギ林や「荻の原っぱ」だったという。ほとんどが区の生産緑地となっている。農家の人は皆な高齢だが元気に働く姿に、野菜作りの素晴らしさを知ることになった。地方でも、都会でも収穫したばかりの野菜の美味しさは格別だ。青菜類は虫が付くのでネットを張り、生産緑地にすることで税金対策にはなるが、無農薬で美味しさが格別とのこと。小さな販売所を設けているが、近くの野菜販売所にも卸しているという。



「ウクライナを想う」 金井紀光

連日、メディアでは、ロシアのウクライナへの蛮行を伝えている。そのあまりの酷さに、妻はうつ状態に陥り、とうとうテレビのニュースを全く見なくなった。

日本に暮らすウクライナの人々による、反ロシアのデモを何度か撮影する機会があった。女性の姿が多く、小さな子どもを連れて参加している人も少なくなかった。道行く人は、次々と寄付の呼びかけに応じ、関心の高さを感じる。レンズ越しに見るデモ参加者の、何かに怯えているような表情が、遠い国の現実を私に引き寄せた。母国で起きていることへの、深い悲しみが伝わってくる。国旗を掲げながら、歌が続く――。



隅田川一岸辺のクロニクル # 2

2015 年 12 月 31 日 16 時 10 分 24 秒

撮影：飯塚明夫

「クロニクル」は年代記・記録・物語の意味。

「撮影の時刻」、「岸辺の景観の記録」、
「岸辺に集う一人ひとりが心に刻む小さな物語」の思いを込めた。



「森へ」 入江進

本州の森と九州以西の森は、明らかな違いを実感する。もちろん植生が違うのだが、より原始に近い気配を感じる。特にガジュマルの森は鳥肌が立つほどの気に覆われているように思う。時には恐れであり、あるときには癒やしでもある。特に雨の日は魅惑に満ちており、好んで入っていく。今回の撮影では惜しくも雨の日に行くことが出来なかったが、異様とも言える樹の存在感を目の当たりにすることはできた。

撮影地：屋久島



「鎌倉無残」 尾辻弥寿雄

昭和 30 年に湘南道路の開削工事で霊山山（りょうぜんさん）とその先端の稲村ヶ崎が切り離なされた。頼朝が鎌倉を城塞都市に作り上げた条件である、三方を山で囲まれたという歴史を無視した工事であった。さらに鎌倉滅亡の攻防戦で新田義貞がこの山（極楽寺の切り通し）を抜けず稲村ヶ崎で竜神に祈った伝説のリアリティーまでも消し去ったのである。

「風景」とは何だろうかと思う。自然が作り出す景色の総称であるが、世にもまれなる美しさ「絶景」という言葉さえ飛び交っている。「光景」という言葉もある。辞典では陽の光で浮かび上がるすべての総称だそう。それなら自然でなく人間が作り上げた「都市景」や「街景」もその一つだろう。人間と自然が融合して作り上げたのが農村風景であるが、人間が自然を強く傷つけた光景が列島改造論以降数多く出現した。1992 年の木村伊兵衛賞作家柴田敏雄氏の「日本典型」や「ランドスケープ」がその代表だろう。この「鎌倉無残」もその一つである。名峰富士と名所江の島を従えた霊山山が痛々しい。 2022 年 1 月撮影



亀井正樹

MFW（モノクロフィルムワークショップ）では白黒フィルムでの撮影から現像、プリントによる表現の可能性を探求しています。個人的には大判カメラでの創作を楽しんでいましたが、最近はハーフカメラでの素粒子表現にもはまっています。あえて荒々しい見せ方でこの“混迷する惑星”を撮っています。デジタル写真のような利便性とは異なりフィルムの現像処理からプリント作業は手間もコストも浪費しますが、そのプロセスも作品づくりの楽しさのひとつです。

現研出版の新企画

PHOTOGRAPH

A4・32P 基本のグラフ誌的な写真集

主旨

現研のすぐれた写真作品のエッセンスをいち早く読者に届けたい。印刷物として貴重な写真を残して伝えていきたい。個展のガイドブックや緊急出版などの要望にも応えたい。しかもできるだけ安くしたい。

「写真リアリズム」「視点」や現研、JRP の写真集などで印刷技術の高さをご承知のとりの東京印書館の協力で実現しました。

第1号は古屋行男さんの「雲南」です

出版費用モデル

印刷代 A4/32P モノクロ 300部で約30万円 カラー約40万円

出版コード ISBN 取得 5万円

編集・デザインは実費



定価 1000 円＋税



古屋行男写真展 「中国 雲南面影」5月6－12日 富士フィルムフォトサロン（六本木）